

フィリピン、 ラロ貝塚での人々の暮らし

小川 英文

東京外国語大学外国語学部助教授

はじめに

私は先史考古学を研究しており、ここではアンコール・ワットのような石造建築とは大きく異なる、狩猟採集民と、貝を採っている人々について紹介します。日本の縄文時代や弥生時代のころのことです。

南シナ海と太平洋が合流するバシー（Bashi）海峡には、北部ルソン島最大の河川であるカガヤン（Cagayan）川が注いでいます。カガヤン川はルソン島北部山岳地帯の水を集めて北流するフィリピン屈指の河川で、流域は広大な沖積平野をようするカガヤン溪谷を形成しています。この川の下流域には、河口からさかのぼること45km地点までの両岸に大小の貝塚群が分布しています（図1）。

上智大学の青柳先生が1970年代初頭に発見されて以来、80年代後半から継続的に調査を行っています。現在の調査地域は河口から20～30kmに位置するラロ（Lal-lo）の町域を中心としたカガヤン川両岸の河岸段丘と沖積平野、そして河岸から10kmまでの東岸丘陵地域です。

ちなみに、私は1980年代の初めごろに、ラ

ロから80kmほど南の洞穴群から出土した石器群を分析したことがあります。そこから出土した石器には、切る、削るといった限定された機能しかなく、日本で発見されている矢じりなどはありませんでした。竹などの各種の植物性素材を削ったりしてさまざまな道具を作製していたようです。考古遺物としてはかぎられたものしか出土しませんが、どのように生活していたのでしょうか。

狩猟採集民とは

この洞穴遺跡から1日ほど歩いた地域に、現在でも狩猟採集民が住んでいます。その人たちは石器こそ使っていませんが、彼らが生活に必要なものをどのように獲得しているかを実際に調べ、よい先入観を頭に植えつけてから、過去を描きだすことに努めてきました。これは民族考古学と呼ばれる分野です。人類学者や民俗学者は考古学に役立つ調査はあまり行いません。そこで、考古学者の目から今日の民族を観察しました。

狩猟採集民といっても、狩猟と採集だけで生きている人々はほとんど存在しません。農耕も知っていれば、なんでもしています。そ

して、現在、狩猟も、過去はわかり、いろいろな冶金技術があったという事実が、に狩猟採集民と思、それでは、狩猟、考えればよいので暮らし、食べる、活をしている人た、ます。彼らは遊動、住しません。また、つ者もいなければ、う平等主義が残っ、は違う点です。

● そのような地域で、器はかぎられた機、飛び道具や槍など、いうことに疑問を、にかかわることな、いと、狩猟採集民、て「猪をとってきてきたから、鹿を、す。このような関係、でいる人たちと狩、の間にあったのでは、この相互関係が、スを再構築するた、必要でしょうか。現在、50km×50kmの範囲、に分布する遺跡を、所ずつ発掘し、遺跡、立地と、立地が異なる、遺跡間でどのような、物を共用しているか、いったことから山地、平地の人々の相互関、を考えています。た、し、一生かかっても

して、現在、狩猟採集に特化している人々でも、過去はわかりません。アイヌの人たちも、いろいろな冶金技術や機織りの技術をもっていたという事実があり、私どものほうが勝手に狩猟採集民と思いきやいただけです。

それでは、狩猟採集民についてどのように考えればよいのでしょうか。いろいろな手立てで暮らし、食べるものの選択の幅を広げて生活をしている人たちであると私は理解しています。彼らは遊動生活をしており1ヵ所に定住しません。また、その社会的な規範は、もつ者もいなければ、もたざる者もないという平等主義が残っています。そこが私たちとは違う点です。

そのような地域で出土する狩猟採集民の石器はかぎられた機能しかもっていないため、飛び道具や槍などをどのように製作したかということに疑問を抱き、ラロ貝塚の発掘調査にかかわることとなりました。調査を行っているところ、狩猟採集民のところに麓から人がきて「猪をとってきてくれ」「散弾銃の玉をもってきたから、鹿をとってくれ」と頼みにきます。このような関係が、古くから農耕を営んでいる人々と狩猟採集を行っている人々の間にあったのではないかと考えました。

この相互関係が形成される歴史的なプロセスを再構築するためには、どのような調査が必要でしょうか。現在、50km×50kmの範囲内に分布する遺跡を1ヵ所ずつ発掘し、遺跡の立地と、立地が異なる遺跡間でどのような遺物を共用しているかといったことから山地と平地の人々の相互関係を考えています。ただし、一生かかってもこ

の発掘調査は終わらないと思います。これまでに発掘調査が行われたのは、7遺跡11ヵ所です。これらはその性格によって、河岸の貝塚遺跡群、同じく河岸の伸展葬墓群、河岸石灰岩台地上の貝塚、そして石灰岩丘陵上の洞穴貝塚に区分することができます。

カガヤン川流域の貝塚群の特徴

カガヤン川の流域には驚くほど大きな貝塚が多数ありますが、そのなかで規模が最大のものは、長さ500m、幅100m、深さ2mにも及び、東南アジア屈指の規模をもっている貝塚です。

一方、私は山地に分布する遺跡にも興味があります。山地でもっともわかりやすく、調べやすいのは洞穴の遺跡です。しかし、熱帯雨林では遺跡を見つけることは容易ではありません。そこで、地表面が露出している場所を探し、地表に土器のかけらや石器が落ちていないかどうかを確認して探しています。

ちなみに、現在、フィリピン諸島は7,000以上の島々で構成されており、多くの民族が住んでいます。ただし、もともとはフィリピン人と呼ばれる人々は存在しません。マゼランによりフィリピン諸島が世界に知られるようになったところに、フィリピン人と呼ばれていた人たちは、フィリピンで生まれたスペイン

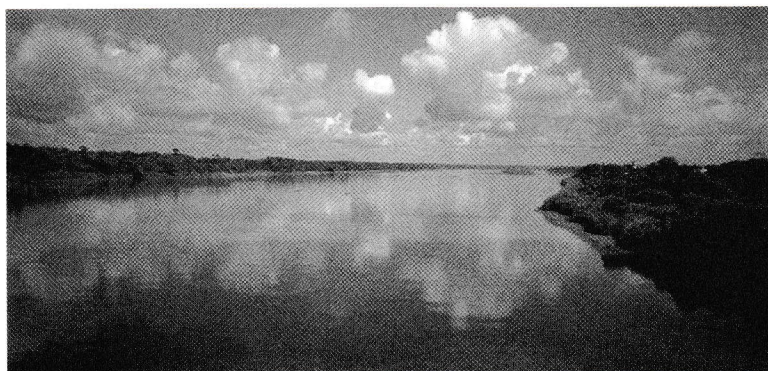


図1 カガヤン川(口絵カラー参照)

人のことで、現在のフィリピン人はインディオス、インド人と呼ばれていました。インディオスがフィリピン人だと主張し始めたのは19世紀後半です。フィリピンという国が成立したのは1898年であるため、昔のフィリピン人というより、フィリピン諸島に住んでいた人々といったほうがよいと思います。

さて、図2はビーナスの誕生にも描かれているシャコガイの、もっとも硬い蝶番の部分からつくられた貝斧です。この図に示す型式の貝斧は、フィリピンのかざられたいくつかの島と、沖縄本島からは出土していませんが、宮古島、石垣島、西表島など先島諸島や八重山諸島で出土しています。沖縄では2,500年前の年代で出土し、フィリピンでは6,800年前という年代がえられています。これらの地域間に交流があったことをどう考えればよいのでしょうか。

また、チャンパ王国の都ヴィジャヤのいくつかの窯で焼かれた陶磁器が、フィリピンのパラワン島の近くで引き上げられた沈没船から発見されました(図3)。

フィリピン大学の考古学の教授に、「フィリピンにきたらベトナムでの調査について話してくれ」と頼まれ、講義をしたところ、その先生が「それと同じものが最近でたよ」といわれ



図3 チャンパ陶磁の四耳壺(ゴサイン窯)

ため、次の日に確認したところ、本当にチャンパ陶磁の青銅碗や四耳壺が出土していて驚かされました。

フィリピン各地の沈没船からはさまざまな遺物が引き上げられています。ある沈没船からは、ヒンドゥー寺院から抜いてきたような石材も発見されています。1754年に亡くなったことがラテン語とアルメニア語で刻まれたアルメニア人の墓石もありました。これらは東南アジアやインドの寺院から抜いてきて、バラストや砲弾と一緒に、マニラやセブという都市の建築資材として積みこまれた石材だと思われます。このように紀元前2000年以前の先史時代以降、大航海時代にいたるまで、フィリピンが世界のなかに包摂されてきた交流の痕跡がいろいろと現れています。

貝塚群の発掘調査

さて、私が発掘しているラロ貝塚の近くを流れるカガヤン川を下ると、川幅が800mほどとルクソールのナイル川と同じくらいの川幅になります。ここでは現在でも貝が採取さ



図2 貝斧



図4 カタヤワン貝塚の岸边(口絵カラー参照)



図5 貝層の上に家が建つ

れています。

ちなみに、川幅がもっとも狭い、幅200mのところには日本の援助で吊り橋が建設されています。

ラロには1595年という銘のある極東で最古の鐘のひとつがあります。フィリピンにはあと2つ古い鐘がありますが、それらの年代もやはり1595年です。1521年にマゼランが到来し、マニラがスペインによるフィリピン経営の中心になるのは1572年で、この年、1595年にスペイン軍はカガヤン川河口まで進出しています。ラロはフィリピン諸島北部の植民地経営の拠点になった場所で、当時、大司教座などが設置されましたが、その後、拠点がほかへ移り、周辺的な存在へとかわっていきます。

この地域では、現在でも貝を採集し、村の川べりには貝を採取する人たちのボートがたくさんあります(図4)。また、貝塚の上に家が建っています(図5)。日本の貝塚の表面は



図6 河岸段丘上の貝塚

土で、貝塚の上に家が建っていることは想像することもできません。深度が2m以上もある貝層が500mほど続いています(図6)。

ラロ貝塚からは貝製と土製のリンリンオーと呼ばれる耳飾りが出土しました(図7、8)。このリンリンオーは、大陸との海を越えた交流を示しています。ラロ貝塚はルソン島のもっとも北のカガヤン州にあり、ハート型の土製のペンダントは、カガヤン川流域で2,000年以上前の貝層から発掘される特徴的なもので、カガヤン州のシンボルに使われています。

ラロ貝塚群の立地条件

河岸段丘には十数カ所の貝塚があり、そのうちのひとつ、直径100mほどの貝塚がブルドーザで壊されていました。壊さないように何度も訴えたましたがだめでした。ただし、その貝層をすべて除いたあとから、土器が検出されました。これにより、貝塚以前にもここに居住地があったことがわかってきました。

興味深いことに、河岸段丘上の貝塚から出土するのは黒色土器で、2.5mほどの貝層の下からは赤色スリップ土器が出土します。赤い緻密な、粘土のような酸化二鉄を含んだ土を水に溶いて、土器に塗ったものです。

壊された遺跡はカガヤン川の西側にあり、その対岸に標高50mほどの石灰岩の台地があります。1971年に、この道路を青柳先生が通

り、貝を拾っていますが、それらはすべて貝塚が崩落したものです。1987年に訪れ、崩落している貝塚から遺物を拾い、その丘の上に登ってみました。

ちなみに、そこはルソン島の最北端で、旧日本軍が最後に追いこまれ、アメリカ軍の空挺部隊が降りてきて挟み撃ちになった場所です。ご存じの『日本人とユダヤ人』の著者イザヤ・ベンダサンが、ここに中尉としており、苦労したことを書いています。日本軍が降伏した場所でもあるため、この地域の人たちは山下奉文の金の延べ棒がここにあると真面目に考えています。金の延べ棒を探すために遺跡がどんどん壊されています。

そのような場所をきれいに掃除して、貝塚の層を調べてみました(図9)。ここには、ほとんど土がなく、いつ貝が崩落するかわから



図7 子持ちのリンリンオー



図9 マガピット貝塚5.5m深度の貝層

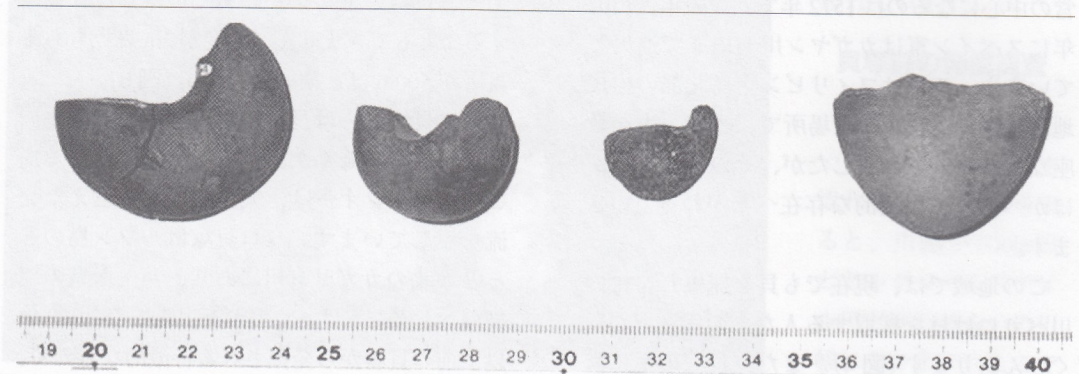


図8 土製リンリンオー(玦状耳飾、欠損品)

ないため、コンパネを張って調査を進めています。まっすぐ掘ることが非常に困難です。地形測量をしたところ高さが3.5mありました。そこで、「3.5m掘れば地面に達するよ」といっていましたが大間違いでした。さらに掘っても、地面はまったく現れませんでした。最終的な深度は5.5mでした。

5.5mの深さの貝塚から土器が出土しました(図10)。赤色スリップが塗られ、櫛歯を押しつけた文様が特徴的な土器です。

ちなみに、現在、日本でもっとも深度が深い貝塚は、東京都北区の中里貝塚で、それでも4.5mです。

貝塚での発掘調査法

現在、貝を採っている人がもっとも多い川辺の村に、最大規模の貝塚があります。川の深さは5~7mほどで、川岸は段丘状になって



図10 マガピット出土有文赤色スリップ土器(BI)

います。そこをまっすぐ掘り下ろすと、貝層の堆積状況がわかります。ここを1986年に発掘し始めました。この80年代に、貝の廃棄を復元する調査が日本の縄文時代の貝塚で始まりました。それと同じ方法で復元しようということで、現在、九州大学大学院の小池先生に参加してもらい行いました。

小池先生はかつて、秋田県の菖蒲崎貝塚の40cmの貝層を1枚ずつはがし、そのたびに表面を写真測量しながら、40cmで32層を検出し、それをもとに、1回の廃棄がどのようになるか調査されています。

それと同じことをラロ貝塚でも行ってみようという無謀なことを計画したわけです。深さが2.3mだどこまで発掘できるか心配しながら、はしごを組んで、手の届く範囲、1m×2mを掘ってみました(図11)。考古学では平面的に土をみながら、色が違う部分、穴、住



図11 やぐらを組んで貝層はがし

居の跡などを確認して掘っていきます。それと同じように、貝層を「ここにピットがある」「こちらから流れているから別の層だ」と確認しながら掘りましたが、3週間で結局60cmしか掘れませんでした。

発掘された貝塚は層位ごとにわけて、その層のすべての貝と土、石、土器の重さと数量を量ります。また骨や植物の種子などを探するために貝塚の水洗いを行います(図12)。

この貝塚の大きな特徴は、二枚貝が中心であり、7種類のかぎられた貝種しか検出されないということです。海の貝はなく、たまに1個くらい発見することがありますが、それはカキなどでした。不思議なことに、これまでに調査したすべての貝塚でも、ほぼ7種類の貝で構成され、そのうちの優勢種はこの土地



図12 水選別後の遺物整理



図13 内陸の貝塚(ダラヤ貝塚)(口絵カラー参照)

でカビビという二枚貝です。

二枚貝の貝殻部を数え、2で割ると何個体あったかわかります。間違わないように子どもに貝を10個の山にして、10個が10個の山になったら、お姉さんに「100個です」といいなさいと教えて、台帳をつけていきます。3種類の二枚貝と4種類の巻貝をすべて数えていきますが、最終的にこのカビビという二枚貝は「全部で27万何個になりました」「それだと13万個体だね」という量になりました。貝塚の考古学は詳細で、フィリピンだから大雑把だろうといわれぬように数字で対抗する必要があります。

平野部の貝塚調査

水田用水路を掘っているユンボがやってきたとき、稲刈りをしているおじさんたちに井戸を掘って欲しいと頼まれ掘ってみると、大量の貝が出土しました。深さは水が湧きでてきたためわかりません。水田であるため、余分な土がほとんど残っていない貝塚です。不思議なことに、ここからは土器は出土しません。なかには動物の骨などが出土した貝塚もありますが、ここは怖くて手をつけられない状態です。今のところ深さが2m以上あることはわかっています。

もう1カ所、先ほどの場所から2kmほど南におりたところの貝塚で発掘しました。ここには、小さなクリークがカガヤン川に流れこんでおり、小川があったため人々が貝を捨てたのか、貝層があったところに小川ができたのかよくわかりません。しかし、ここでも深さ

2m以上、直径100mほど貝が堆積しています。水田のなかに忽然と現れています。ここからも土器は出土しませんが、2点ほどの石器を拾いました(図13)。

そこからさらに水田が5kmほど続き、山のほうに石灰岩の台地があり洞穴遺跡がみられます。さらに西側の対岸にも貝層がみられます。現在は貝を採っていませんが、かつては貝を採っていたと思います。貝塚の間にシルト層がありますが、これは、あるとき大きな洪水があったこと、その前にも貝を採っていたことを表しています(図14)。

1986年の台風のある日、なにか遺物が発見できるのではと期待していたところ、地下の小さな水脈を中心として川へ水が流れており、土が落ちているところから頭蓋骨がたくさん出土している場所を発見しました。そこは墓地だと気づき発掘したところ、上からは、貝層と一緒に黒い土器が、下からは赤い土器が出土しました。そして、貝層が現れない時期に、すでにそこに人が住んでいた痕跡が認められました。貝を採っていた場所と同じ場所に住んでいても、前は貝が現れず、層が新しくなると貝が現れます。そこで、この川の環境変化を調査する必要があります。

図8で、最初に紹介した耳飾は、上のほうが欠けていますが、貝層の下のレベルから出土しました。

また、田中先生が発掘した貝塚では16世紀ころの中国製の陶磁器が地表面から2m以上下から出土しました。この貝塚は、わずか4、500年しかたっていないということになります。

貝塚は、有機物が溶けにくいいため、動物の骨や魚の骨、植物の種子が残っている可能性が高いことから、掘りだした土を洗ってみる必要があります。

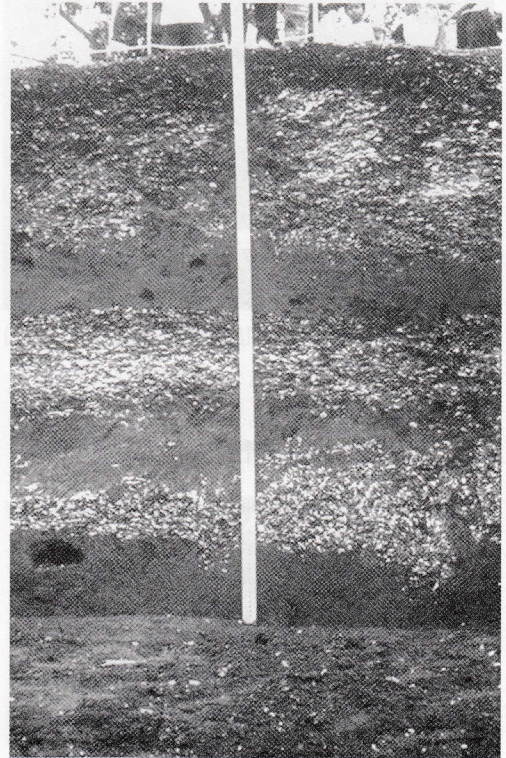


図14 シルト層の間層がはいる貝層(サンロレンソ貝塚)

現在の貝採集法

山に狩猟採集民がいるのと同じように、現在の調査地でも、貝を採っている人たちがいます。その人たちの貝の採り方、食べ物を調べてみました。貝は、三角形の籠のようなものを川底に沈めて採ります。これは籐で編んでつくられていて、このことから針金がない時代には、籐を用いていたことがわかります。

船にのり、竹で編んだ屋根のようなものを船に対して直角にして水中にいます。待っている間はタバコを吸っていればよく、気持ちのよいものです。日本各地で同じような貝の採り方がみられますが、鹿児島では一生懸命漕いでいます。ある日ラロを訪れた鹿児島の人がこの様子を見たとき「こっちのほうが頭

がいい」とあきれていました。

現在では、情けない量の貝しか採れませんし、大きな貝も採れません。いわゆるシジミのような貝ばかりです。昔はこのような貝は採らず、大きな貝だけを採っていたと思います。そのことは、発掘すると明らかです。地表面からヤマトシジミのような小さな貝が検出されます。この貝はフィリピンの各地でみられ、だいたい塩辛にします。普通は、エビや小魚でつくりますが、ここでは貝で塩辛をつくって売っています。貝以外に、大きな籠で魚を採ったりもします。

洞穴遺跡での発掘

川から直線距離で10kmほど離れた洞穴内からも、貝が出土しました。図15において、下のほうが白くなっているのは石灰岩の岩盤です。岩盤の上の層から、平地貝塚を構成している貝と同じものが検出されました。じつは、川べりの貝塚を発掘しても石器はほとんど出土しません。やはり、山との交流は難しいのではないかと思います。しかし洞穴では4m²、深さは20～30cmしか発掘していませんが、石器が80点も出土しました。川岸で

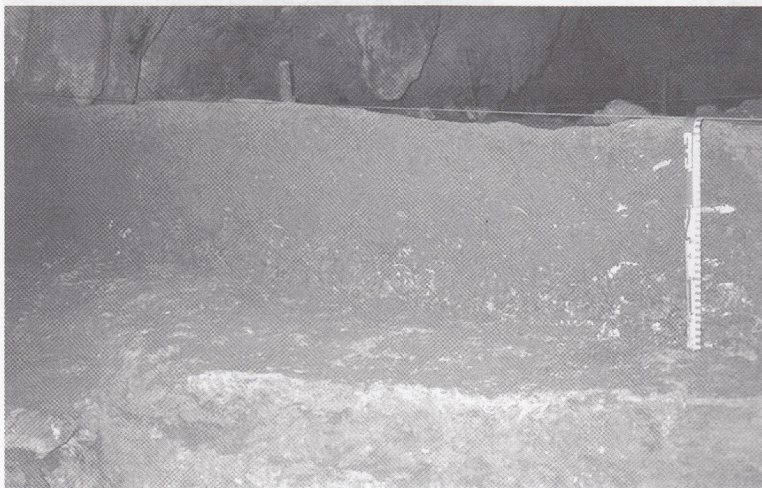


図15 洞穴の貝層(マバゴッグ貝塚)

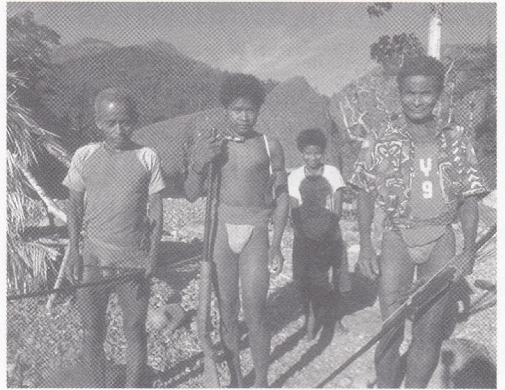


図16 狩猟採集民

はこれまでいろいろところで発掘していますが、石器はわずか6点しか出土しませんでした。ここから出土する石器は不定型な剥片石器です。石の矢じりは、今も昔もつくられていません。

ネグリトといわれている狩猟採集民の人たちは、釘を叩き伸ばしたような矢じりを製作したり、散弾銃をもっています。もちろん、熱帯雨林に関する知識は豊富です(図16)。

ラロ貝塚群での生活史

以上の遺跡の発掘調査を総合すると、遺跡群全体の年代は、遺跡の立地、文化層の層位、石器、土器、陶磁器などの遺物の出土状況などから、相対的に5期に区分することができます。すなわち、赤色スリップ有文土器(R I)(図10)→赤色スリップ無文土器(R II)→黒色土器 I (BI)(図17)→黒色土器 II (B II)(図18)→貿易磁器(14～17世紀)です。



図17 黒色有文土器 (BI)

これらの遺物のほとんどは貝層中から出土しますが、赤色スリップ無文土器は河岸貝塚貝層の下のシルト層から出土します。これらの土器群にはいずれも方角石斧が共伴します。年代は赤色スリップ有文土器を出土する遺跡で約B.P.3000年、黒色土器Ⅱを出土する遺跡から約B.P.1000年という¹⁴C年代値がえられています。黒色土器Ⅱは伸展葬墓の副葬品として、ガラス製ビーズとともに出土します。貿易磁器は、16～17世紀に属する福建、広東製青花の碗と皿を中心として、伸展葬墓群の副葬品として出土します。

洞穴遺跡は現在まで1ヵ所のみが発掘ですが、河岸段丘の貝塚遺跡と同じ貝種(淡水産の二枚貝)で構成された貝層中から赤色スリップ無文土器とともにチャート製剥片石器群が出土しています。また、洞穴内攪乱層のなかからは方角石斧の刃部の再生剥片もえられています。

調査開始から10年間ほどは、貝塚遺跡の発掘で剥片石器は検出されませんでした。しかし最近になって、貝層下のシルト層にまで発掘調査が及ぶようになり、赤色スリップ無文土器群と同一の文化層から、わずかに数点ですが、同一地点からまとまってチャート製剥片石器が出土するようになりました(図19)。



図18 黒色無文土器 (BII)



図19 不定形剥片石器

その後、丘陵地帯の調査を開始して洞穴を発掘すると、わずかな発掘面積に対して多くの剥片石器が出土しました。これらの剥片石器は洞穴内貝層中(貝種は河岸段丘上の貝塚の主要成分と同じ)から出土しますが、赤色スリップ無文土器と共伴しています。河岸段丘貝塚の貝層下シルト層中から出土する赤色スリップ無文土器は、洞穴と同じように剥片石器をとまいませんが、貝はともないません。洞穴内で出土した赤色スリップ無文土器が河岸段丘シルト層中の土器と同一時期とすると、洞穴の貝はどこで採取されたものかが問題として残されています。

ラロ貝塚の環境復元

最後に、なぜ川の環境が変化したのかを、生物学と自然科学、地質学の前田保夫先生に

も協力していただき検討しました(図20)。今から6,000年ほど前、日本では海面が2~3m高かったといわれています。そして、前田先生の試算によると6,000年前、フィリピンの北部の海水面は現在より1m高くなっていました。そのため、川は今よりゆっくり流れ、少し淀んでおり、沼地のような環境であったと推定されます。

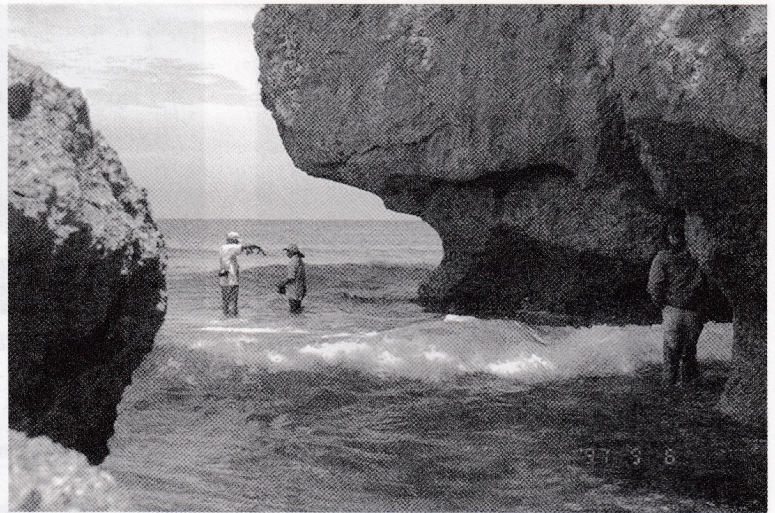


図20 海蝕崖の調査を行う前田先生

現在の砂地の環境に生息する貝が生息していなかった可能性があります。

カガヤン川の下流域の広い範囲を調査しました。日本国内では文化の違う人はあまり住んでいませんが、ラロでは農民、狩猟採集民、そして貝採集民など異なった多様な暮らし方

をしている人たちがいます。異なった生活をしている人たちでも孤立しているわけではなく、相互に交流しながら生きているということテーマとして発掘しています。それを調べることができ、東南アジアはおもしろい地域だと思います。

Q & A

■Q■

ラロ貝塚で出土するような大きな貝は、乱獲によっていなくなったのでしょうか。

●A●

大きな貝が小さくなったのは、採集圧で採れなくなったと考えるのがよいと思います。あまり採れないときや、貝によっては爆発的に成長することがあり、生産量が高まることもあります。

商売になり、現金に替えら

れるためどんどん採っていると、小さな貝まで採ってしまうことになります。小さくなると同時に、量まで少なくなります。そのようなところでは、現在も貝が小さくなっています。貝塚を掘っていると、昔はこんなに貝が大きかったのか、というぐらい大きな貝が出土します。

■Q■

川べりに多くの貝が堆積していましたが、貝塚と貝層の

堆積とはどのように違うのでしょうか。

●A●

写真で紹介した貝は、貝塚の貝が崩落したものです。僕は子どものころから川というと、コンクリートで固められた川しか知りませんが、コンクリートで固められていない自然の川は、台風や洪水の襲来により、大きな領域が削りとられて流され、デルタを形成するための土になります。

今から400年前のスペインの記録をみると、河口が1kmほど伸びていることが観測されています。川も削りとられていくように、貝塚の貝が削りとられて、川べりに自然堆積のような感じになります。貝塚は、人工的に形成されたごみ捨て場です。自然堆積と思われるものは、確認されていません。

当初、考古学の人に「こんなにたくさん堆積してるのは自然堆積、大量死ではないか」といわれたことがあります。しかし、人工遺物が含まれており、人の廃棄行動によって

形成されたことを確認することができます。

同じ緯度のベトナム北部から南へ移る地域に大きな貝塚があり、そこからは土器が見つかりません。そのため、自然に大量死したのではないかとわれています。地点ごとによって、遺物の出土するところもありますが、ラロ貝塚は自然堆積ではないと考えています。

■ Q ■

貝の料理法として塩辛をあげられましたが、ほかにどのような食べ方をしていたのでしょうか。

● A ●

塩辛は料理というより調理だと思います。それと、保存のための加工です。日常的な食事のおかずとして調理をするという意味であれば、焼いても、煮ても食べられると思います。しかし、貝を採っている人たちを調べていると、採った貝を現金にして、お米や肉を買うという商行為が中心の利用法です。日々、貝を採って自家消費することは現在ほとんど行われていません。売るために採っています。